# 博多遺跡群第 247 次調査出土骨牌の材質

新美倫子（名古屋大学博物館）

博多遺跡群の第 247 次調査では A-1 区の I 層から骨牌が 1 点出土した。この資料は長辺 3 cm ×短辺 1.7cm の長方形で厚さは 0.4cm である。片面には 10 個の円形の凹みが掘られている（図 1）。資料に関する詳細は第Ⅲ章を参照されたい。

図 1 において黒色矢印で示した資料の側面（短辺）には複数の層が同心円状につみ重なっているのが見られ（写真 1）、灰色矢印で示した側面（長辺）では、これらの層は直線状に重なっている（写真 2）。また、表面が風化・剥落している部分を観察すると、この層状の構造に沿って剥落が起きている（写真 3）。断面に層状の構造が見られることから、この資料は骨やシカ類の角ではない。時間の経過と共に組織が付加されて成長線を形成するタイプの原材で、哺乳類の歯あるいはウシ科など一部のグループの角と考えられる。その点では「骨牌」という器種名は実情を反映していないとも言える。

そして、資料の剥落部分などの質感から見て、角ではなく歯であろうと思われる。側面（短辺）に見られる層状構造が同心円で、側面（長辺）の層状構造では直線が平行線であることから、バウムクーヘンのような円筒状の成長輪のある原材を使用したと考えられる。この条件を備える歯としてまず考えられるのは象牙である。参考資料として写真 4 に象牙（現生標本）の断面を示した。象牙以外にも、例えばマッコウクジラの歯やセイウチの牙などでも同様の製品の作製は不可能ではないが、層状構造に見られる同心円があまり歪んでおらず正円に近いことから、象牙の可能性が高いように思われる。ただし、当資料の側面（短辺）には象牙の横断面に見られる特有の菱形模様（シュレーゲルパターン）は確認できない。この資料が象牙製であるにもかかわらず風化等のせいで菱形模様が見えないのか、あるいは象牙製でないから菱形模様を確認できないのかはわからない。

なお、福岡市埋蔵文化財課の佐藤一郎氏と岩熊拓人氏にはこの資料を分析する機会を与えていただき、琵琶湖博物館の高橋啓一先生には象牙についてのご教示をいただいた。ここに感謝いたします。

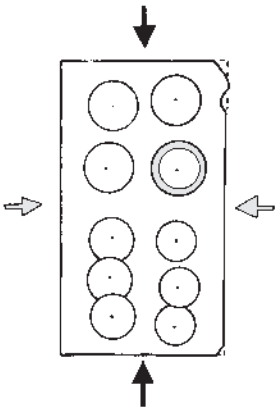

図 1 骨牌の表面

写真 1 側面（短辺）

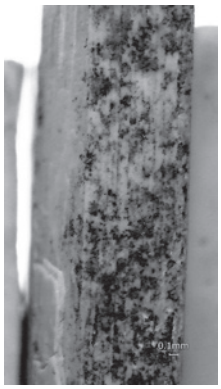

写真 2 側面（長辺）

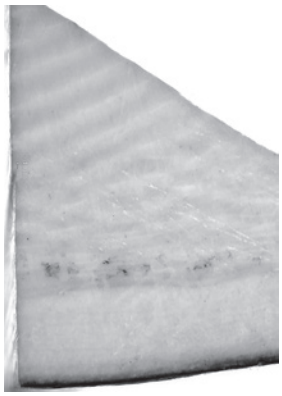

写真 4 象牙断面（現生標本）

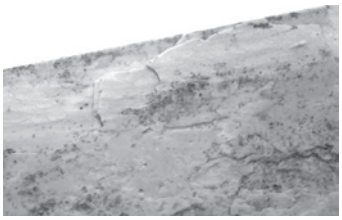

写真 3 剥落のようす